

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

棚田の米作りから考える水

昨年の六月初め、県の鳥サンコウチョウが飛来する「不動谷の森」の棚田で田植えをしました。

湖西市北部の山間部には、昭和三十年代までは棚田が広がり、米づくりが行われていました。しかし、日本の高度経済成長とともに機械化が難しい棚田にはスギやヒノキが植えられ、いつしか日光が差し込まないような不健康な森となりました。

その不健康な森を再生し、健康な森にしようと、父がやっているボランティア団体が動き始めました。私も、よくそこに連れて行ってもらっていたので、荒廃した森の樹木の間伐や除伐、下草刈りの作業を手伝いました。このまま森を荒廃させてしまったのでは、森が死んでしまい、災害の原因になったり、動植物が生息できなくなったりしてしまうという危機感を持っていました。森全体からすれば、私たちの作業は一部でしかありません。しかし、作業をしているおじさんたちは、とても、生き生きと生きていました。

それから四年が経ち、人が入れないくらいに荒れていた不動谷の森もすっかりきれいになりました。しかし、五十年も放置されていた棚田は、田んぼとして使えないくらいに土が荒廃していましたので、土づくりも大変な作業でした。枯れ葉を集めてたい肥にしたり、小川から水を引いてきたりしました。棚田も美しくよみがえりました。

田んぼは、米をつくるだけではなく、水をためておく大切な場所でもあります。水がたまれば、カエルやイモリ、トンボなどの水生生物が生息するようになります。それをえさにする鳥やへびなどの動物も生息するようになります。植物も日差しを浴びてよみがえってきます。日光が差し込む森は、下草が茂り、豊かな自然がよみがえります。そして、そこからわき出る水が、棚田に蓄えられ、動植物が生息する豊かな環境が整えられます。

静岡県 湖西市立白須賀中学校 三年 片山 裕里加

水があることによって、自然環境が豊かになり、心がいやされる空間となります。

「足が抜けないよ。」「泥だらけになっちゃったよ。」などと、棚田に多くの声が響き渡ります。森からわき出たり、小川から取り入れたりした豊かな水がはられた棚田に、手作業でしっかりと苗を植えていきました。泥だらけの服で休憩していると、渡り鳥で準絶滅危惧種のサンコウチョウの「ツキ、ヒ、ホシ、ホイ、ホイ、ホイ」という鳴き声が聞こえてきました。不動谷の森が整備され、棚田ができたことによって、えさとなる昆虫が増えたから聞くことができたのかもしれない。住宅地からそれほど離れていないところに、サンコウチョウが生息できる場所があることに驚きます。これも、森づくりをして、棚田を再生したからかもしれません。これが里山の営みだと、作業をしていたおじさんが教えてくださいました。里山は、自然と人が共存しながら、自然の恵みを私たち人間がいただくことができる大変ありがたいところです。

強い日差しの照りつける暑い夏には、泥だらけになって田の草取りをしました。成長した稲の穂が顔に当たってかゆくなるのですが、田の草取りがおもしろくて夢中になって取っていました。

十月には稲を刈り、十一月には脱穀をしました。「いいにおいだ。」「これが新米か。」と言いながら、土づくりから一年掛けてできた米をおいしくいただきました。水からの恵みが、私たちの命を支えていることを実感した米づくりでした。

これからも、水があることによって、豊かな自然が守られ、私たちの命も支えられていることを多くの人に知らせていくとともに、水のありがたさを感じながら、森づくりや棚田の再生に取り組んでいきたいと思えます。